

## □北海道南西沖地震の体験から学んだ教訓

北海道奥尻町役場総務課 主幹 木村孝義

## 1. 地震発生…体感したことのない大きな揺れ

平成5年7月12日午後10時17分…

その夜、妻と娘は就寝していたが、私は居間でテレビを見ながらくつろいでいた矢先、突然の縦揺れに飛び跳ねた。今まで体感したことのないその大きな揺れに「地震だあ!」と叫び、途中から横揺れに変わった状態の中、転びながら妻子のもとへ駆けつけた。今にも倒れそうなタンスや鏡台を両手と片足で抑え、妻子の布団の上に倒れるのを夢中で防いでいた。その時の状況は今でも鮮明に記憶している。揺れと同時に食器棚から食器が落ちて割れる。家具の上にあった物が落ちて散乱する。その家具もドミノ倒しのように崩れ落ちる。本棚の本が飛び出す。熱帯魚の水槽の水は溢れ出す。窓ガラスの割れる音。蛍光灯が揺れて天井に繰り返しぶつかる。天井や家の柱がミシミシ音をたてる…。「もう収まるだろう」と心の中で冷静さを装うようにつぶやくが、同じ時間と同じ惨状が繰り返される…とにかく家全体が揺らぐ中、家中足の踏む場もないほどに物が散乱し、そのうち停電にもなり、妻は叫

ぶ、子どもは泣きじゃくり、もう私もパニック状態となっていた。

大きな揺れの影響で焦点の合わないその「現実」は語れるが、その恐怖心は今でも言葉にできないものである。それでも揺れが弱くなったのを見計らい、妻子を連れて着の身着のまま走って高台に逃げたのは、これほどの揺れなら必ず「津波」が襲ってくることを予測し、目の前に日本海が拓け、海拔3メートルほどの地に建つ我が家が飲み込まれることを確信したからだ。暗夜の中を駆け抜け、津波の心配がない丘の上にとどり着いたとき、足から大量の血が出ていることに気が付いた。家を飛び出すときに真っ暗で何も見えなかったこと、散乱した家具やガラスの上を裸足で必死に逃げたためだとその場で思いながら、流血した足を見つめてなぜか安堵した記憶がある。

正確な揺れの時間は感じ方によって十人十色だが、私は1分以上は続いたような気がした。当時、町内には地震計が設置されていないため正確な震度の記録はないが、建物の崩壊などから最低でも震度6以上の烈震であったと推定されている。震源地は奥

尻島の南西沖で、震源の深さ 34km、地震の強さを示す規模はマグニチュード 7.8 という日本海の観測史上最大級のもので、年配者に伺っても、昔の文献などを調べても、このような大きな地震はこの島初めての出来事だった。北海道全域や東北地方、遠くは石川県輪島までの広範囲で、最大で震度 5 の中震を記録していた。

## 2. 津波来襲…自然の猛威と恐ろしさを痛感

北海道では地震・津波と言えばまず東側、つまり太平洋に面した釧路市や根室市が有名だ。日本海側は大昔にはあったようだが、地震すら起きるのが珍しいほどの不毛地帯で、それまでは地震・津波と言えども他人事のようにとらえていた。だが、ちょうど 10 年前の昭和 58 年 5 月 26 日に秋田沖を震源とする「日本海中部地震」が発生、奥尻島にも 3~4m の津波が襲った。その時は津波が来るなど町民は誰も予想していなかった。その証拠に、津波の前兆として一度海水が引くが、普段水面があって渡れない島の観光シンボル「なべつる岩」に渡って記念撮影する人もいたほどだ。この日本海中部地震の津波で、漁業者と観光客の 2 名が犠牲になっていた。

それからちょうど 10 年後の平成 5 年、北海道南西沖地震が発生した。日本海中部地震の際、あの地震の揺れと津波を一度経験しているからこそ、北海道南西沖地震の際には、町民は地震発生直後にすぐに避難しなければならないことを直感した。というのは、北海道南西沖地震の揺れの大きさと時間の長さは、日本海中部地震の際の規模

とは比較にならないほど大きなものだった。町民はとっさに「この揺れは 10 年前よりも大きいし長い。イコールこれだけの大きな揺れなら絶対津波が押し寄せて来る。

しかも 10 年前より大きな津波が。イコール早く高いところへ逃げなければ」と判断したのである。地震情報の伝達状況等を振り返ってみると、地震発生が午後 10 時 17 分、札幌管区気象台がいち早く 22 分に、つまり地震発生から 5 分後に日本海沿岸に「大津波警報」が発表された。町役場にも職員が続々と駆けつけ、防災行政無線放送で 27 分に、つまり地震発生から 10 分後に全町民に向け「避難命令」を発令した。いずれも平常時で考えられる段階では迅速な初期対応だったが、津波の速度は我々の予想をはるかに越えた。地震発生から 3 分後の 20 分には島の北端である稲穂地区・稲穂岬に第 1 波が既に到達、集落は 9~11m に及ぶ津波で壊滅状態を余儀なくされた。震源地から最も遠い距離にある島の南端である青苗地区・青苗岬でさえ、地震発生から 5 分後の 22 分には 9~12m に及ぶ津波がきており、警報も避難命令も間に合わなかった。津波の速度は一般に時速 500km と言われるが、奥尻の場合は 500~800km と推測、これはジェット機よりも早い速度とのこと。実際、青苗地区では「地震の揺れが収まってから逃げたのでは遅い」と判断し、揺れている最中にすぐに家外に飛び出し、走って高台を目指した者は助かり、揺れが収まってから逃げたり、車で逃げた者はその大半が津波に飲み込まれた。それが現実なのである。地震が発生し津波が予想される場合は、まず何よりも「着の身着のまますぐに走って少しでも高い場

所へ逃げる」ということが鉄則である。あえて津波から助かる有効な手段は、この他にはないと私は断言したい。

北海道南西沖地震による奥尻町の人的被害は、死者 172 名、行方不明者 26 名、合計 198 名にのぼる犠牲者が出た。人口 3,900 人余りの中での 198 人は、町にとって何よりも耐え難いものとなった。現在まで遺体すら見つからない行方不明者が 26 名もおり、残された家族の心境を察すると胸が締め付けられる思いがする。重傷者 50 名を含め、町の人的被害者は確認されただけで合計 341 名にものぼる。住家被害は、全壊 437 棟をはじめ合わせて 1,410 棟を数え、小さなこの町の住家全体の約 80 パーセントに及ぶ。道路、河川、漁港、水産業、農業、林業、商工業、衛生、教育関連、公共施設、被住家など、町のありとあらゆる過去に前例のない被災は言うまでもなく、町全体の最終被害総額は約 664 億 3 千万円にものぼった。町の年間予算規模がそれまで約 50 億円というひ弱な財政基盤からして、この約 13 倍、つまり町の 13 年間にも及ぶ総被害額は、いかにこの町にとって甚大でかつ大打撃であるかを、自然がもたらした震災の猛威から痛感させられた。当時、町の理事者は、その膨大な被害総額と何もかも津波で流された被災地を目の当たりにし、「これで奥尻町は終わった。復興や再建は無理だ」と語っていたほどだった。

私は町役場職員として、寸断されていた幹線道路を回避して山道を通り、翌朝早くに稲穂地区の被害状況確認に向いたが、その眼下には今まで建ち並んでいた住宅が流失し、基礎部分しか残っていなかった。

家の残骸と遺体がごろごろと転がっている。過去の街並みが無い。一つの集落が全滅だ。壊滅状態の惨状を見た瞬間、本当に津波が来襲したことを認識し、津波の恐ろしさを実感した。津波は夜だったので、誰もその全貌をまともにはっきりとは見てはいないが、よく映画やアニメにあるようなサーフィンのような波ではなく、湧き水が湧き上がってくるようにグルグル渦巻き、段々と水位を増し高くなって押し寄せてきたと、そして、地下から唸り声をあげるようなゴォーという鈍い音がしたと、被災者の数人が語っている。津波は、島の北端で最大 11.7m、南端で最大 12.3m、震源に近い島の西側では最大で 23.3m という信じ難い高さに及んだ。津波の痕跡がそれを物語る。この高さはビル 8 階の高さに相当する。ある学者によれば、津波の最高到達高は 29m、30m、なかには 31m と力説する学者もいる。なぜこんな予想もできぬ大津波に至ったかという、「稲穂岬や青苗岬は地形的に非常に遠浅となっており、ジェット機以上の速度でこの島に迫った津波は、浅い水深でブレーキがかかったことでその高さを増し、強度と威力が増幅されたことで大きな被害に及んだ」と分析されている。

そんな高い津波が突然襲ってくるなど、新鮮な魚介類を届け、穏やかで心が和む眼下の海からは今でも想像し難いことだ。想像し難い津波高だけに、想像し難い大惨事を生んだのである。

### 3. 火災発生…消火進まず、被害に拍車をかける

確認された火災は、青苗地区で船舶火災2件、建物火災2件、奥尻地区で車両火災1件。とくに青苗地区の火災は丸一日中燃え続け、青苗地区の下町で津波被災を免れた住宅さえも、非情にも全てを焼き尽くした。町最大の被災地となった青苗地区は、地震、津波、火災の三重被害を受けたのだ。

消防車も津波に流され、消防団員である町民も被災した状態では消火活動が進むはずもなく、さらに被害に拍車がかかり、拡大する一方だった。まさに成すすべがない状態だ。出火原因は未だに特定できず不明だが、この火災によっても青苗地区で2名の犠牲者が出ている。

### 4. 復興宣言…予想以上の早さ、全国支援の賜物

奥尻町はこのかつてない未曾有の大災害に対し、経験もマニュアルもなく、その対応法に当初は頭を抱えたが、同年10月「災害復興対策室」というプロジェクトチームを設置し、復興にあたることにした。同室は、北海道から4名の専門職員の派遣を依頼し、町職員10名の合わせて14名体制でこの難題に挑んだ。私もこの対策室のメンバーとして、微力ながら町の復興に携わった。

まず平成9年度を目標とした、つまり5年間で完全復興させる「奥尻町災害復興計画」を策定、「生活再建」「防災まちづくり」

「地域振興」の3本柱を基本とし、被災者とまちづくりに手厚い対策を講じた。この計画は、全国の被災地、とくに長崎県の雲仙

普賢岳を参考とし、町独自の対策も交えながら計画を練り上げた。復興に不可欠だったのは、全国各地から寄せられた約198億円にもものぼる義援金の中から、約144億円を原資とする「災害復興基金」を設立したことだった。この基金から、住宅再建や中小企業再開、まちづくり、その後の生計、防災対策等を見越した事業に伴う助成など、73項目に及ぶ被災者への手厚い対策を講じた。この高額に及ぶ義援金、そして全国から寄せられた多くの救援物資があったからこそ、5年間という予想を大きく上回る短期間で町の復興と再建がなされたのだ。その過程で地元の関係機関はもとより、国や北海道、そして何よりも町以外から救援に駆けつけた警察や保安庁、自衛隊、消防団、そして学生や一般ボランティアなど、多くの懸命なご支援があったからこそその復興なのである。町は今年、震災から10年目、そして平成10年3月に完全復興宣言してから5年目の節目の年を迎えた。こうして今平和な暮らしができるのも、全国津々浦々の皆様の多くのご支援の賜物であり、私たちは永久にその恩恵を忘れてはならないと感謝の念を抱いている。

### 5. 防災対策…個人レベルで防災意識を

被災直後の対策としては、一時避難所に替わる応急仮設住宅を早い段階で完成させ、被災者の住宅の確保を図った。その後の復旧、復興対策として町が講じた事例をあげると、町防災計画を全面見直し、防潮堤の整備、津波水門の設置、人工地盤の建設、奥尻島津波館の建設、青苗小学校の高床式によ

る新校舎の建設、太陽電池を利用した避難誘導灯の設置、避難路を各地区42箇所を設置、避難場所を各地区22箇所指定、救急避難袋・防災ハンドブックの全世帯配布、防災ヘルメットの全町民配布、携帯電話鉄塔施設の整備、防災行政無線放送施設の整備など。勿論、毎年全町民を対象に地震・津波を想定した防災訓練も続けている。

万全とは言えないが、行政サイドで考えられる手立ては打った。世間では南海沖や東南海地震が近いとか、東京に直下型大地震が発生するとか叫ばれている。地震列島・日本では、いつ、どこで、どの程度の災害が起きるか、かつ今すぐ、どこで発生しても不思議ではない。いざという「その時」のための防災対策は、各行政や自治会サイドで進めているが、どれほど多くの対策を講じて

もそれで十分と言い切れないのが防災対策でもある。しかし、「災害は忘れたころにやってくる」と言われるように、予知や予測が出来ないのが自然災害あり、人間の頭で考えられる防災対策を覆すのが自然界の猛威であり、恐怖である。どんなに対策を万全にしたところで、そこに暮らす個人各々が意識を持たなければ意味がない。「自分の生命・財産は自分で守る…」から行動できてこそ、そこに防災対策が生まれる。地震にしる津波にしる、完璧に防げるという有効手段はない。自然災害はそんなに甘くはない。また、自然災害は誰のせいでもない。被害を防ぐと言うよりいかに最小限に収めるか、個人レベルでその意識を高めて対策を講ずるべきで、それが防災の基本だと私は思う。